鹿児島女子短期大学紀要
第56号（2019）75～86頁

翻訳

A. A. ミルン『名誉ある平和』〈1〉

A. A. Milne *Peace with Honour* 〈1〉

著：A．A．ミルン
A. A. Milne

訳：吉村　圭
Translation: Kei Yoshimura

鹿児島女子短期大学

Keywords：A. A. Milne, Pacifism, First World War, English Literature

キーワード：A．A．ミルン，平和主義，第一次世界大戦，英文学

［訳者解題］

2018年11月11日，第一次大戦は終結から100周年を迎えた．本稿で翻訳を行う『名誉ある平和』（*Peace with Honour*）は，人類が初めて経験したその世界規模の現代戦争について，それが二度と繰り返さないよう願った作家が，自身が考える平和への道筋を記した平和論である．

この平和論は，『くまのプーさん』（*Winnie-the-Pooh*）の著者として知られるA．A．ミルン（Alan Alexander Milne）が，前世紀に行われた２つの大戦の幕間である1934年に記したものである．彼が生み出した愛すべき「プー」の世界からは想像しがたいことであるが，ミルンは前世紀に行われた２つの大戦の時代を生き，第一次大戦では陸軍に志願し，ソンムでの塹壕戦を経験している．また著作に目を向ければ，ここで扱う『名誉ある平和』だけではなく，その最終章として1940年に執筆された「名誉ある戦争」（“War with Honour”），そして1941年に出版された小冊子「戦争は無限を求める」（“War Aims Unlimited”）など，戦争に関する著書を多数執筆している．[1] ヴォルシュレガー（Jackie Wulschläger）が指摘するように，ソンムでの戦場を体験したことは，ミルンの平和思想を確固たるものとし，『くまのプーさん』の物語にも影響を与えている（182）．つまり，ミルンの思想とそこから生み出された作品を理解する上では，彼と戦争との関わりを深く理解することは不可欠なのである．

ミルンは生涯平和主義者であった．しかし自伝『今からでは遅すぎる』（*It's Too Late Now*）の中で述べるように，自身が戦争に志願した第一次大戦当時でさえも，ミルンは平和主義者であった．彼がそれでもなお陸軍に志願し，戦地へと向かった理由は，当時流行した「戦争を終わらせるための戦争」（War to end war）というプロパガンダを信じたためであるという（211）．また，ミルンは『名誉ある平和』の中で，多くの若者たちが戦場に駆り立てられたことについて次のように述べている――“life in wartime is hell anyway, and only in uniform can one escape from thinking about it”（51）．この言葉から，徒軍していない若者たちは，常に戦争という地獄について考えていなければならなかったという当時の風潮をうかがい知ることができる．実際に，ミルンは自伝『今からでは遅すぎる』の中で，兵士になることだけが国のために命を懸ける行為であり，それを拒否するものは臆病者と揶揄される風潮があったと述べている（211）．また，例えば第一次大戦当時，平服で街にいる若い男性に白い羽を渡す「白い羽運動」（White Feather）が行われていたというが，林田敏子によるとこの白い羽は「志願制下にあっては，平服でいる男性にささやきかける良心の声として，徴兵制が導入されたあとは，良心的兵役拒否者を公の場にさらし者にする恥辱のしるしとして機能した」という（32）．恐らくそうした風潮の中で兵役に就いた一人が，ミルン自身だったのであろう．高山宏が「少々露出狂じみているミルンがこの四年間のことだけは頑として思い出そうとしない」（64）と指摘しているように，ミルンは特に自身の戦場での体験についてほとんど語っていない．そして我々は，自伝の中で語られたわずか数ページから，銃弾が飛び交う中ソンムの塹壕を駆け抜けたことや，戦友の死があったことを伺い知ることができるのみなのである．

本稿で扱う『名誉ある平和』は，長年執筆が構想されたのち，1933年に執筆が開始され，翌34年に世に出されることになる．ミルンは本書を通し，世界に二度と戦争を起こ

さないためにはどうすべきか，自らの考える平和のあり方を模索している．その中でも特にミルンが強調するのは，徹底した軍事力の放棄と，それによってもたらされる戦争という行為の廃止である．ミルンは本書の中で次のように述べている――“Preparations for defence are as dangerous to the cause of peace as preparations for aggression”（124）．つまりミルンは，攻防の目的を問わず，各国が軍事力を有する限り平和は訪れないと考えていた．そしてそのすべてを放棄することでのみ，「普遍的平和」（Universal Peace）（147）がかなうと主張しているのである．[2]

このミルンの平和論は，その後の歴史を知る我々からすると，あまりにも理想主義的なものに見えるかもしれない．しかしミルンはその続編である「名誉ある戦争」の中で，『名誉ある平和』を書いた理由を以下のように述べている．

I wished to destroy all that had been conventionally thought about war by those who had not thought about war; I wished my readers to look at modern war with their own eyes, not at a tradition of war through the eyes of their ancestors.（６）

我々は第一次大戦という現代戦争を「自分たちの目を通して」は知りえない．そして『名誉ある平和』は，第一次大戦という人類が初めて経験し未曽有の死者を出した現代戦争を実際に戦った作家が書いたものなのである．それはミルンという個人の思想や作品をする上ではもちろん，平和主義者でありながらその戦争を戦った当時の人たちの精神を知る上でも，極めて重要な資料となるものであるといえる．

以上のように，『名誉ある平和』は第一次大戦という惨禍を経験した人間の精神を映す１つの鏡であり，第一次大戦終結から100年を迎えた現在にこそ広く読まれるべきものであるといえる．本稿ではその一助となるべく，邦訳を行う．なお，紙面の都合上本稿では序文から５章までを扱う．

［解題注記］

1　ミルンは，イギリスがドイツに宣戦布告し，大戦への参戦を表明した直後，1914 年８月５日号の「パンチ」に，「アルマゲドン」という小作品を掲載している．その作品は，ヨーロッパが戦争を始めるまでに起きたできごとのパロディとなっており，サラエボ事件や，セルビアとオーストリア間での最後通牒をめぐるやり取りなどを思わせるできごとが冷笑的に描かれている．詳しくは拙著「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』」及び拙訳「アルマゲドン」参照．

2　ミルンは，当時すでに台頭しつつあったナチスドイツが勢力を拡大し，第二次大戦が勃発したことを受け，自身の平和論のあり方を大きく軌道修正することになる．というのもミルンは，1940 年に著した「名誉ある戦争」の中で，ナチスドイツ占領下での平和が戦争よりも悪い状態として，ドイツへの徹底抗戦を支持するのである（20）．詳しくは拙訳「A．A．ミルン『名誉ある戦争』」の訳者解題にて解説を行っている．

［本文］

名誉ある平和

序文

私は長年この本の執筆について考えていた．そして実際には1933年７月から1934年７月の12か月をかけてこの本を執筆した．このような本を書いている間には，主題に影響しそうな言説や出来事に押し流されないでいるのは非常に困難だった．しかし私は（完全に成功だったとはいえないが）一時代的な論争で気を散らすことや，あまりにも時事的な話題を用いないように努めてきた．もし結果としてあまりにも時代遅れになってしまい，亡き人がさも生きているように語られていたり，すでに地位が失われた人がさもまだ我々の命運を左右しているように語っていたとしても，（どのみち私の議論に影響はないので）脚注を差し込むことで美観を損なうことは避け，むしろそのままにすることにした．

おそらく私は「平和主義者」（Pacifists）と「平和主義」（Pacifism）と書いたすべてに注を加えるべきだろう．というのも言葉に厳密な人はそれらを“Pacificists”“Pacificism”と綴るのだ．また私は，スコットランド人であれば「イギリス」（Great Britain and the Northern Ireland）と書くであろうところを，いずれもイングランド（England）と書いている．この本の中の何かが誰かの気分を害するとしても，これらの単純な短縮が攻撃のさらなる原因とみなされないことを願う．それらはまやかしの原因にもほとんどならないようなものなのだ．

A．A．M

1章　戦争（War）

1914年の夏，オーストリアの皇太子がサラエボで殺害された．それはサラエボの援助によるものだったといわれている．オーストリアはサラエボより大国であり，オーストリアの名誉は，満足と呼べる何かを要求した．セルビアは要求されたもののうち，特定のものへは謙虚に従うことを受け入れたが，特定のものは拒んだ．オーストリアの名誉には完全なる満足が求められていたため，残された要求は強奪すること以外に道は残されていなかった．用いられた兵器によって，皇太子ではない1000万の兵士となった男たちと，直接間接問わず，数えきれない幾千もの女性や子どもたちが殺された．しかしながらそれでもなお，目標は達成されないままだった．さらなる服従はなされることはなく，4年たってもまだなおオーストリアは満足しないままだった.

これは可能な限り簡潔にまとめた大戦のストーリーだ．私は読者の意識がそこに向かうように，あえて最初にこれを書いたのだ．そのストーリーはこれまでにも他の数多の著者によってより精巧に語られてきたが，それらは私が書いたこの冒頭の文よりも真実に満ちているとはいえない．戦争の起源，意味，目的について私たちが知る必要があることは，この345文字の中に与えられているのだ．この14行の間に，世界に起きた無益な悲劇が記録されているのだ．(1)

2章　すべての平和主義者たちへ（Pacifist All）

1

2人の人の間で交わされる口論というものはしばしば犬のけんかのレベルに堕するものだ．犬のけんかとは，いかなるときもどれが自分の犬のもので，どれがそうでないのか，誰にも分からないという特性を持つ．私は以前平和主義者と軍国主義者が議論しているのを聞いたことがあるが，あまりにも互いの立場が急速に入れ替わっていたため，その議論が最も白熱したときには，彼らが互いに相手の意見に完全に同意してしまっているという明らかな事実に最も腹を立てているようにみえた．つまり，軍国主義者ほど平和を望むものはおらず，平和主義者ほど国防軍備に関心を持ったものはいないというものだったのだ．しかし彼らはそのことがとても納得ゆかない様子だった．

そのため私は，私自身の立場を可能な限り明確に示すことからはじめようと思う．

私は戦争に反対だ．簡明な人物であるクーリッジ大統領は，ある朝妻から，その朝の牧師の説教のテーマは何だったのかと聞かれた．彼は「罪だったよ」と答えた．妻は詳しく内容を聞きたかった．牧師は聖書のどの行を引用したのか．会衆へのメッセージは何だったのか．牧師は罪について何を語ったのか．「彼はそれに反対だとさ」と大統領は簡潔に言った．同じ理由で，私は戦争に反対だ．私はこの言葉を，戦争が間違っているという意味で使っている．同様に私は子どもたちに残虐行為が行われることも，奴隷や異教徒が火刑に処されることも，貧困者からの搾取も，純真さの喪失も間違っていると考えている．

戦争は間違った行為だ．そして馬鹿げたものでもある．ときとして，劇場でコメディアンがあまりにもすばらしく無責任に，完璧でみごとなほど馬鹿げたことをするので，それを見たものは笑い転げて座席の背もたれに沈み込むほかなくなってしまうことがある．数分後，そのコメディアンは同じことをする．何度も…何度も…繰り返し．すると次第に見ているものは笑うのをやめる．神にとって人の死は，人にとってのハエの死程度のものだろう．神もかつては人の戦争という発明品に大笑いしたに違いない…そして笑い疲れ…この不条理な小さな生き物たちが，よりすばらしく馬鹿げたことを思いつくよう願うようになったのだ．

戦争とは馬鹿げたものだ．戦争というものは，人間の邪悪さとおろかさの究極の表現技法だと思う．その邪悪さよりも，むしろ子どもじみたおろかさが，より私の胸を引き裂いたと感じることが幾度もあったのだ．

2

もしヨーロッパのすべての人たちが私と同じように考えてくれるならば，ヨーロッパには二度と戦争など起きないだろう．もし幾人かの重要人物が私のように考えてくれるならば．もしラムジー・マクドナルドが，ムッソリーニが，スターリンが，ヒトラーが，そしてフランスの閣僚となるあらゆる人々がミルンであったならば，そのとき，いかにその他の展望が耐えがたいものであったとしても，ヨーロッパには戦争など起こりえないのだ．もしビーヴァーブルック男爵が，ロザミア子爵が，ヨーロッパを代表する50の新聞社を経営する人物がミルンであったならば，これ以上ヨーロッパに戦争など起こりえないのだ．もしローマ法王が，カンタベリー大主教がミルンであったならば，これ以上ヨーロッパに戦争など起こりえないのだ．

戦争をなくすための明確な「ミルン・プラン」があるわけではない．これは単に事実を明らかに示しただけなのだ．戦争というものは人間が自ら生み出しているものだ．そして人がそれを放棄さえすれば，もはや存在しえないものなのだ．同様に，発言権のない人々の声のために語り，あるいは彼らを導く立場の人たちが戦争を放棄すれば，もはや戦争は存在しえないのだ．そして発言権を持つ人が深く何かを感じたとき，彼は文章や演説を通して，自分の考えに人々を導くように努めるのだ．私と同じくらい戦争に対して深く感じる人たちを説得するために，私はこの本を

書いている．すべての人たちがこの本を読んで（そんなことはありえないのだが），そしてすべての人たちがこの本によって説得されたとしたら（そんなことはもっとありえないことだ），その時目的は達成されるのだ．つまり，戦争がなくなるということなのだ．私は迅速かつ満足のゆくような反応があるとは思っていない．しかし，この本を読んだ中の一部の人たちがこの趣旨に納得し，そして他の人たちを同様に説得しようとしてくれることを願っている．そのようにして少しずつ私の考えが広がり，やがて世界に影響を与えることを願っているのだ．聖パウロは（もっともこんな人と自分を比べるのはどうかと思うが）コリントの友人に手紙を出すのを思いとどまることはなかった．というのも彼はまさか自分の手紙が「コリントへの手紙」として聖書に記されることになるなどとは思わなかったからなのだ….

ここで，長老政治家は辛抱できない様子で言葉をはさむ．(2)

しかしだねえ（と彼は叫んでいる），君が広めたいと思っているその素晴らしいアイデアというものは何なのだね．誰に，そして何のために説得したいと思っているのか．そこらにいるけんかっ早い連中を除けば，私たちはおおむね君と同意見なのだ．私たちはみな戦争というものがいかなるものか知っているし，もう戦争なんてものは望んではいない．しかし私たちが今直面しているのはこういう問いなんだ．つまり，*いかにして戦争の勃発を避けるのか*．もし軍備の制限によってというのならば，どうやってそれを実行したらいいというのかね．もし条約や協定によってというのならば，我々はどうやってそれを強いることができるというのかね．我々はみな現代の戦争が大災害に匹敵するものだと知っているが，何をそこに導入したらいいというのかね．君は法王や大主教について，彼らを改心させたいようなことをいっている．彼らを何に改心させるというのかね．彼らが戦争の恐ろしさに気づいているとは思わないのかね．君と同じくらい，彼らもまた平和を望んでいるとは思わないのかね．みんな君と同じだと思わないのかね．考え方ではなく，何をすべきかを言ってみたまえ．我々は自分たちが考えたことをやってきたんだ．望まれるもののために，我々は１つになっている――つまり平和のためにだ．そして今我々の前にある問題は，いかにしてそれを手に入れるのか，なのだ．

私はこの手の想像上の妨害者のことを「長老政治家」として典型化する．しかし彼の考え方のあり方はあらゆる世代のあらゆる職業の人々に共通するものだ．「今では私たちはみな平和主義者だ」という考えは，ますます一般的で，しかし誤った信念となっている．

みんなが平和主義者であるはずがない．

長老政治家についてしばらく考えてみてほしい．何世紀もの間，彼は戦争を，自らの政策の道具として利用してきた．今，彼は突如としてそれを自身にとって，文明にとって，そして敵にとって致命的なものであると思っている．彼は不安げに，このよく知っている使い古した道具によって，自分の身を滅ぼさないための何かをいかにしてこしらえようかと考えているのだ．それはまるで母親が爆弾で遊ぶ子どもを眺めているようなものだ．そしてその爆弾を取り上げる代わりに，優しく言っているのだ．「あなたたち，ボールで遊んだほうがいいんじゃない？ママがボールを探してあげるから，しばらくその爆弾で遊んでなさい．」このようなことは，現実にはありえないはずだ．ソーダ水のグラスの中に毒が入っているのに気づいたら，人はそれを捨てるものだ．もし自分を平和主義者と思っている今の人たちが，戦争が毒だと思うのならば，我々はそれを捨ててしまうことだろう．我々はそれを舌にからませ，どうやって味をよくしようかなどと考えはしないだろう．私がこの本を書いているのは，（私が考えるように）皆に戦争が毒であると考えてもらい，そして（多くの人がそう考えるように）それが強烈な，まったくもって不快な味のする薬であるなどと考えてほしくないからなのだ．

なんということだ！私が言及した，偉大なる，良き，賢き人々は，この件については私が考えるようには考えてくれないのだ．首相とジョン・サイモン子爵は現代の戦争を破滅的なものだと考えている．私は戦争を間違ったものだと考えている．ローマ法王とカンタベリー大主教は戦争を恐ろしいものだと考えている．私は戦争を間違ったものだと考えている．ビーヴァーブルック卿とロザミア卿は戦争を納税者にとってあまりにも大きな負担だと考えている．私は戦争を間違ったものだと考えている．要するに，私は戦争を悪だと考える一方で，ここで言及された紳士たちと，彼らと同様の考えを持つ百万の人々は，それを善というにはあまりにも大きすぎるもの程度に考えているのだ．

3

すべての人々が，戦争が終わることを望むのならば，我々がそれぞれ異なる熱意，異なる理由でそれを非難することはもはや大きな問題ではない．むしろこの差異への認識が，平和を成すための最初の重要な点であるといえる．

もし差異がなかったとしたらどうだろうか．もし我々がみな同じものを，同じように，同じ理由で同じ熱意をもって求めており，もし確信をもってそれを成し遂げることができないことに気づいたならば，我々はただ，人知を超えた自然の，あるいは文明の法則に立ち向かっているという結論を下すしかなくなる．そのため，もし我々が誤って，みなが平和を同じ理由，同じ熱意で求めていると考えるな

らば，その成果の認めることができなければ，戦争の廃止が人間の力を超えたミッションであるという結論に至らざるをえないのだ．

心から平和を愛する者がこのように述べる姿を想像することができる．

「私はベストを尽くしてきました．私は常に戦争に不安を覚えてきましたし，先の戦争に参加したのも，それが戦争を終わらせるための戦争だと説き伏せられ，そう確信させられたからです．しかし戦争は今では，それを終わらせるにはあまりにも世界にとって強力なものになってしまっています．この15年というもの，私たちはその問題に取り組むうえで最大の良心を持ってきたのです――そして私たちはどこにいるでしょうか．1913年時点よりも戦争の廃止に近づいているとはいえないではないですか．1913年当時，いくつかの例外を除いて，私たちはみな十分準備ができ，勝利が確信される限り，戦争は自然で都合の良いものと考えていました．でも今では，私たちはいくつかの例外を除けば，その幻想を捨て去っています．私たちは，それが自然でも都合のよいものでもないと認めています．そしてそれは征服された側だけでなく，勝者でさえも同様に苦しむものであることを知っています．しかしそれでもなお戦争がなくなる兆しはないではないですか．それでは何をすればいいのでしょうか．いや，何もできないのです．ただ，隣国と同程度に十分次の戦争のために備えておく意外には．何もできないのです．地獄が再びふたを開ける前にこの世界が終わることを祈る以外には．」

私にはそれほど希望がないようには思えない．重要人物たちが彼らのなすべき仕事をしてくれるだろう．しかし彼らは一枚岩ではないのだ．というのも，これまで彼らは平和への決断をしてこなかった．彼らはただ小道を模索してきただけなのだ．名誉ある平和への，保証された平和への，誰かが望むような平和への小道を．

ある人とその妻と，コックとメイドがいたとして，みなが冷蔵庫を購入することを決めれば，冷蔵庫はすぐに家にやってくるものだ．しかしもし夫が冷蔵庫は欲しいがそれは妻の許可が得られてからだと考え，その妻は夫がたばこをやめない限りその余裕はないと考えていたら．そしてコックが冷蔵庫の置き場所は貯蔵庫しかないと考え，メイドがキッチンを除けばその置き場所はないと考えたとしたら．しかし仮にそれからその家に冷蔵庫がやってくることなく数年が過ぎていたとしても，冷蔵庫はもはや永久に得ることができないものだと考えるのは間違っている．

もし数年が経過したあとに，冷蔵庫はさして高価ではなく，場所も取らないことがわかったとしたら，この場所と値段に関する長きにわたる家庭内での議論は皮肉なものになってしまうことだろう．

そして，戦争の廃止なしには名誉も保証もあり得ないと思っているものにしてみれば，名誉ある平和，保証された平和に関するこの長期間の国家的議論は同様に皮肉なものでしかないのだ．

3章　イングランドの名誉（England's Honour）

1

何かを明確に考えることの難しさは，我々はこれまで自分たちを取り巻いてきた環境を抜きにして，何かを語ることができないという点にある．結果として，我々の思考というものはすでに，それを始める前からある特定の文章によって形作られているのだ．もう一度言うが，言葉は多様な意味を持っており，我々がある意味でそれを用いても，それは読者（そして私たち自身）に別の意味で使っているのだと思い込ませることがあるのだ．「人間の本質」（Human Nature）という言葉を例にとろう．この言葉は「動物性」（animal nature）の意味かもしれない．その場合は単に生物としての本能を意味する．あるいは「人間の精神の本質」（man's spiritual nature）の意味かもしれない．その場合は神に対する本能の意味となる．その区別がつかない人にとっては，戦争の言い訳としてしばしば用いられてきた「人は『人間の本質』を変えることができない」という言説は，ほとんど神への冒涜のように伝わることだろう．一方で，事実すべての人の営みは精神性の試みであり，またそうであるべきだ．人間だけが，他の獣たちと共有する動物性を克服することができるのだ．そして同様に「戦い」（fight）という単語もそうだ．この言葉は憎き相手を打ち負かすために直接殴り合うものから，70マイル射程の毒ガスによる死を受け入れることまでを意味する．

「名誉」（honour）という言葉にも同じことがいえる．

2

大戦がはじまる前には，平和的な思想をもつものは，平和ボケと揶揄された．そのころは愛国主義者が嫌悪感を抱かずに考えることができる唯一の平和は，名誉ある平和だけであると誇らしげに強調されていた．その言説は現在もなお存在している．

いかにも高潔な響きである．「名誉」という言葉に連想される誉れ高さが我々の心に飛び込んでくる．誉れ高き男が小なるものを受け入れられるのか？我々は名誉あるものだ！イングランドの名誉が問題となっているのだ！戦闘準備にかかれ！

ここで少し，国家が名誉を語るとき，その言葉が何を意味しているかを考えてみよう．

「名誉というその言葉に何がある？」かつてフォールス

タッフは尋ねた.「その名誉とは何だんだ？空気さ」と彼は続ける.[3] しかしこれは定義というより意見だろう. 辞書では「名誉」(Honour) とは「義務と権利に対する, 良好な感覚または厳格な忠誠」と定義されている. ワーズワースはそれを「人間の精神が形作ることができる最も良好な正義の感覚」と呼んでいる.[4] どれも大変結構だ. しかしラブレスが, 名誉をこれ以上愛せなくなるからアルシアを愛せないと述べるとき,[5] あるいはメロドラマの英雄が「不名誉よりも死を！」と叫ぶとき, 彼らはその言葉に, この定義では縛りえない精神的な含みを与えているように思われるのだ. 私はむしろある詩人の言葉をわざと一部間違えて引用し, 以下のように言いたい.

恐れずに, 我々が生きる法に則ってふるまえ
そして正しいと思えるならば, その正しいものに従うのだ
もし名誉が大いなる軽蔑にされているならば[6]

事実, その心の中に真実, 正義, 美の理想的な形を抱いている人は, 誉れ高き男と呼べる. 彼はそれらに, いかなる世俗的な利益以上の価値を認め, 死それ自体にも屈することがない.

スティーブンソンは「死のリスク」を気高き職業における試金石であると述べている. それによって,「大いなる軽蔑にさらされながら正しいものに従うため」の機会が与えられないならば, 気高さは失われ続けるのだと述べているのだ. そのため誉れ高き男は, 自らの信念に合わないものを受け入れるくらいなら, すべての苦しみに耐える覚悟をしなければならない. 不名誉よりも死を, ということなのだ.

国家は名誉を持たない. というのも, いかなる国家も「死のリスク」を犯そうとしないからだ. いかなる国家も, 真実に対して不誠実であるくらいなら, すべての苦しみに耐えるということをしない. いかなる国家も義務と権利に対する, 良好な感覚または厳格な忠誠を示さない. 大いなる軽蔑にさらされながら, 正しいものに従うことをしないのだ.

というのも国家は１つの法しか持たないからなのだ. つまり, 自己を守り進歩させるための法だ. 国家は１つの神のみを認めるのだ. そしてその神とは, 国家それ自体なのだ.

3

この事実があるにも関わらず, 国家はその名誉について声高に主張し続けている. 国家はその名誉を守るために, 戦争をしつづけているのだ. 信用詐欺師もまた同様に, 声高にその名誉を主張するものだ. そして任務を遂行するやただちに姿をくらますことで, その名誉を証明してみせるのだ. そのため, 国家が名誉を守るために戦うとき, 神の名をむやみに用い, 異神を崇拝し, 偶像を作り, 安息日を犯し, 盗み, 殺し, 姦通をし, 偽証を用い, 隣人の所有する鉄鉱山を要求することで, その名誉を証明してみせるのだ. このようにしてモーセに示された10の戒律のうち, ９つを破っているのだ.

今やこの点において驚くべきことは何もない. もし国家というものが自己発展という法以外にいかなる法も認めないのならば, もし自己保存と国家の拡大を究極の義務と捉えているならば, もはやモラルと正義などという言葉は何の意味ももたないのだ. そのうち我々は, ほとんど不可避的にその規則によって, そこに所属する人たちのまっとうな本能を蹂躙するよう強いるその統合体を, 守り, 崇拝し, 保護する価値があるのかを深く考えるかもしれない. しかし現在のところ, 私は真実だけに関心があるのだ. 自己が存在する以上に崇高な目的を持たぬ国家には, 守るべき名誉などないのだ. 国家は自分自身以外に守るべきものを持たないのだ.

私が名誉 (honour) を語るとき, それは魂の堅固なる部分について語っている. 威信 (prestige) の意味で使っているのではないのだ. あるいは誉れ高き男が決闘の時代に命を賭した, 作りものの誇りのことを言っているのではない. この誇りや威信というものは外部からその栄養を取っており, そして外部からのみ害することができるのだ. しかし名誉は内に宿り, そしてその所有者だけが傷つけることができるものだ. 国が感心を持っているのが本当に名誉であるならば, それは国家が内に宿すものであり, 他国に侵害することはできないものだ. しかしそれがもし威信であるのならば, それは他国によって侵害されうるものだといえる. 戦争は国の威信には必要だが, 名誉には必要のないものなのだ.

国家が誉れ高き男のように, 理想のために「死のリスク」を負わない点において, 国家はその名誉を欠いていると私は主張してきた. 私がこのことを書いている最中にも, 我が母国はそのことを証明するような決定をしている. (おおむね休戦記念日の11月11日のことだったが) アメリカと日本に並ぶために, 予定されていた8000トンの巡視船の代わりに, ２隻の10000トンの巡視船が作られたことが発表されたのだ. このことについて少し注意を払ってみたい.

我々はアメリカとは平和関係を築いている. 日本も同様に平和関係にある. これらの国々は先の戦争では同盟国だったのだ. 同盟国だったアメリカと戦争することはないだろう. かつての同盟国である日本とは確かに戦争に発展することがあるかもしれない. しかし巡視船はすぐに時代遅れのものになるだろう. もしかしたら我々はその巡視船２隻が時代遅れになる前に, かつて同盟国であった日本と

戦争を始めるかもしれない．またもしかしたら，戦争に負けたとして，その敗因は巡視船が足りなかったことではなく，その積載量のわずかな違いによるものなのかもしれない．しかしこれらはいずれも，可能性でしかないのだ．

これらの可能性が，結果としてどれくらいの確立で現実となるのだろうか．どれくらいの確立で２隻の巡視船が現役のうちに，２つの同盟国と戦争をすることになるのだろうか．そしてどれくらいの確立で，そのうちの１国にわずかな巡視船の積載量の違いで敗れることになるのだろうか．百分の一だろうか．千分の一だろうか．それとも百万分の一だろうか．みなはそれぞれに自分の考える数字を思い浮かべるだろうが，その予想に共通しているのは，可能性は極めて低いということなのだ．イングランドは自らに平和への理想があると宣言する．イングランド政府によると，それは軍備の制限を通して至ることができる理想だという．しかしイングランドは，この軽蔑すべき「死のリスク」を犯そうとはせず，その理想に近づいているふりさえもしないのだ．

あるいは別の例を示そう．

数か月前，日本と中国は戦争をしていた．イングランドはジュネーブ会議で日中戦争を非難したが，その間に両国に武器を輸出することで大忙しだった．もはやイングランドの名誉というよりは，ユーモアセンスが乱れたのだろう．イングランドは平和をもたらすための自己犠牲の輝かしき例として，気高くも武器の輸出を禁止した．そしてその気高き行いにどの国家も従わず，自分が本当の犠牲を払っていることに気づくや否や，大慌てで輸出規制を解いたのだ．かくしてイングランドはかつて非難した戦争において，当事者の両国に武器を提供することになったのだ．

こんなものは立派な人物の行うことではない．充分に金を持った名誉ある人物は，自分が貧しくなることは（もちろんありはするのだが）千にひとつもないので，貧しい人を見殺しにすることはしないし，商売敵が商売を自制したからといって，アヘンの売買を自制することもしないのだ．しかし先に述べた，イングランドが行った２つの行動について考えると，名誉という言葉への言及は，もはや下品な行為であると気づくだろう．政策にも，理想への忠誠にも，正義への良心にも，重大な軽蔑はないのだ．「そして正しいと思えるならば，その正しいものに従うのだ」――この言葉もイングランドとアル・カポネを，アメリカとホラティオ・ボトムリーを，フランス・ドイツとセルビアの黒手組の指導者を結びつけて想像すると，同様に滑稽だ．ここに名を挙げた個々人と同様に，国家というものは自身の進歩のためにしか何もしないのだ．

4

イングランドの名誉！ある人はこれには何か意味があるのだと考えてみるかもしれない．愛国主義者にとっては，その言葉がフランスの名誉，ドイツの名誉とまさに同じ意味であると理解することが必要なことなのだろう．しかしそんなことは何の意味もないのだ．世界から我々は「不誠実な英国」と呼ばれている．この伝統的に使われてきた不誠実で排他的な呼び名は，他国の嫉妬から生まれた驚異的に不平等な発明だと反論したくなるところだ．ある意味では，その通りなのだ．しかし本当に誉れ高き人物というものは，どんなにねたまれても「不誠実なヨハネ」「不誠実なヘンリ」などと呼ばれはしないのだ….

しかし大勢の詐欺師集団の中に，他と比べて面の皮の厚さがやや足りない詐欺師が一人いたとする．その詐欺師は作戦の前に，自分も任務上の役割は果たすが，良心の咎めのためにその不正利得の分け前をもらう気にはどうしてもなれないと宣言するような人物なのだ．そして収益の分配の際には，形式上，記念としてガラスのかけらを自分ももらっておくべきだろうと述べる．こうして毎度変わらず，彼はダイアモンドをごっそりとせしめてゆくのだ．彼の悪党仲間にとって，彼の悪行は特別な意味をもって当然だ．彼は不誠実なトマス，あるいはもっと華やかな名前で知られることになるかもしれない．

それでは，ここで我々は，名誉に関していえば隣国となんら変わることがないのだということを認めようではないか．あるいはそれが認められないのであれば，我々が彼らについて思っているのと同じ程度にしか，隣国も我々を高く評価してはいないのだということを認めようではないか．というのも簡単な事実として，他国を信頼している国など存在しないのだ．誠実さをもって他国を信用する国などないのだ．他国に自国の名誉を与えることができる国など存在しない．なぜならば，どの国も他国に与えるべき名誉などという言葉を持たないからなのだ．国家が名誉について語ることなど，コレラ菌やバスマットや九九の一覧表がその名誉について語るのと同じことなのだ．

４章　国家の威信（Nation’s Prestige）

1

前章で考察した通り，名誉という言葉を国の方策に結びつけるのは不可能だ．では代わりにどの言葉を用いればよいのだろうか．ここでは威信（Prestige）を試してみよう．[7]

語源をたどれば「威信」とは「幻想」や「ペテン」の意味だった．そして国家の威信というものは実際にその程度のものだと気づくだろう．しかし差し当たって，私はこの言葉を，意味が変わり，今では広く受け入れられている「名声」（reputation）の意味で用いる．というのもこの威

信ということばを名誉（honour）と混合して呼ぶことは，その言葉の深い精神的なつながりを呼び起こす一方で，威信を名声と混合したところでいかなる精神的つながりをも呼び起こすことはないのだ．というのも，名声という言葉自体は根底に深い意味を持っていないからなのだ．人はクリケットでもきゅうりでも足の治療でも名声を得ることができる．だとしたら，「国家の名誉」という言葉は，何かへの名声のことを意味するのだ．そしてその何かとは，名誉という言葉がつけられているだけで，ちっとも名誉あるものではないのだ．つまり「名誉ある平和」とは，単に威信が損なわれない平和という意味でしかないのだ．

では愛国主義者にとって非常に親しみのある，この威信や名声というものは一体何なのだろうか．

2

政治家たちは「イングランドが植民地を失ったら」とか，あるいは今風にいうと「海外の領地」だが，それを失ったら「我々はただちに第五勢力に転落することになるだろう」と語りたがる．どうしてそうなるのかが私にはさっぱりわからない．ドイツは植民地を持たなかった時代にも，力のある国というだけでなく，驚異となる国という印象さえあった．イタリアもトリポリやソマリランドから驚くほど多くの道徳的糧や生活維持に必要なものを得ているわけではないし，人口もイングランドより幾分少ないにも関わらず，欧州評議会では同等の扱いを受けているのだ．植民地などなくても，イングランドは数でも自然でも資源でもほとんどの国に勝っているのだ．それでもなお，イングランドはただちに第五勢力に転落するという．それはなぜなのか．

私には理由がわからないのだ．おそらく誇張してあるのだと思われる．おそらくこの発言をする人の言いたいこととしては，植民地を失ったら，イングランドは今ほどには力のある国ではなくなるということなのだろう．しかしこの件について耳にする言説としては，それが公のものでも私的なものでも，このイングランドの崩壊した状況について述べた幾百もの発言の中で，いつでも「第五勢力」（fifth-rate Power）という言葉が使われているのだ――それは「五流の国」（fifth-rate country）でも「五流国家」（fifth-rate-nation）でもないのだ．

時には，正確で明瞭な単語が使われてきたのだ．

我々は漠然と「イングランド」や「わが祖国」という言葉を使っている．イングランドよ．汝が間違っていようとも，*私は汝を愛している．――我が祖国，それが汝だ――祖国の習わし――我が母国よ，汝が間違っていようがいまいが――イングランドよ，我がイングランドよ――祖国の歌，祖国の法よ*．我々がイングランドという言葉を使うとき，ある時には，我々が幼少期から心に育んできたあらゆるイングランドを意味している．またある時には，それはホワイトホールのようなイングランドの街角のことを意味している．そしてまたある時にはウールウィッチアーセナルによって代表されるようなイングランドを意味しているのだ．

ここで我々は，心の中のイングランドを切り離して考える必要があるだろう．イングランドというものの１つについて言及しているとき，我々が無意識のうちにその他の意味について考えないようにするためだ．「イングランド」という言葉につきまとう思い出は（あるいはイングランドという意味での「祖国」という言葉）は，明確にものごとを考えようとするときには，「名誉」という言葉につきまとう思い出と同様に危険だ．そのためここで，イングランドを３つの意味に区別しよう．１つは国（Country）としてのイングランド，１つは国家（Nation）としてのイングランド，そして権力（Power）としてのイングランドだ．

国…国家…権力．それらはそれぞれに，いかなる声で語り掛けてくるのだろうか．

国は詩人や画家，ずっと前に死んだ建築家や名もなき職人たちの声を使って語り掛けてくる．あるいはその丘や谷や森や川のせせらぎ，牧草地などの声で．またその声は村の教会や自然であることもある．我々はそのイングランドを愛しているし，あえてそれについて話をすることもしない．そのイングランドはささやき声で，我々は秘密を漏らすことはできない．我々に幾千もの声で語り掛けてきながら，声なる声を持たない．我々はそのイングランドを，イングランドということでしか知らない．我々はイングランド人であり，それは我らの家なのだ．

これに対し，国家としてのイングランドは明確な声を持っている．国家は我々に，その時代の政治家の声を通して語り掛けてくる．それは我々に正義を命じ，我々の法律を作る．公共設備を保存し，芸術を奨励するのだ．

これに対し，権力としてのイングランドとは，他国に対して発言する国家としてのイングランドのことだ．

アーデンの森…ホワイトホール…ウールウィッチアーセナル…．

今や，読者も気づいたことだろう．愛国主義者が（この言葉も漠然と，他者が愛国主義者でないと決めつける人物，と定義されている）イングランドについて語るとき，彼らはいつもこの第３のイングランドを，つまり偉大なる権力としてのイングランドについて語っているのだ．彼はシェイクスピアやディケンズのイングランドについて考えていないし，隣人をチェーホフやドストエフスキーの愛読者だからといって反逆者扱いすることもない．彼はイギリス政府についても考えていないし，ファシズムに対して民

主主義を称賛するわけでもないのだ．ただ彼は他国と競い合う国家としてのイングランドについて考えている．つまり権力としてのイングランドについて．

それでは偉大なる権力とは何だろうか．そのことについての議論などありえないように思える．権力とは戦争のための力によって，大か小かで語られるものだ．

そのため愛国主義者がイングランドの威信が危険にさらされていると叫ぶとき，偉大なる権力としてのイングランドの名声が危険にさらされているということになる．つまり彼はこういっているのだ．イングランドがもつ戦争遂行能力が危険にさらされている，と．

3

イングランド人というものは自国の名声を誇りにしている．彼らが自分たちは持っていると思いたがっているに過ぎない，言論の自由についての名声だ．それはほとんどの人にとって親しみ深いものなのだ．そして純粋なる正義への名声，これもほとんどの人にとって親しみ深いものだといえる．そしてこれはあくまで比較によるものだが，他国と比べて比較的役人が腐敗していないことへの名声．また偉大なる文学にインスピレーションを与えたこと，ユーモア，頑固さ，そして病的悲運を受け入れる快活さを持っていることへの名声なのだ．

国際情勢の中でイングランドが偉大なる権力としてふるまっているかぎり，これらの名声は危険にさらされることはないし，軍事力によってそれを守る必要もない．危険にさらされるのは，ただ単に交戦国としての名声――そして（たとえ100万人を殺したとしても）他国には「ばかなまねは許さない」と誓った戦う国としての威信だけなのだ．

ここで改めて明らかにしておきたいのは，愛国主義者が「名誉」という言葉を使おうが，「威信」という言葉を使おうが，彼らが言わんとするのは，イングランドが軍事力によって欲したものを得，あるいは得たものを守るというところにあるのだ．

国の威信について興味深い話がある．国の威信とはすぐにはっきりと力を持った大国に脅かされることはなくても，はっきりと力の劣る小国には脅かされうるものなのだ．たとえばイングランド大使館がマドリードでスペインの暴徒から攻撃され，住民が死んだとする．そのとき愛国主義者はスペインを直ちに侵略することでのみ国の威信が維持されると感じるのだ．いっぽうもしそれがパリで起きた事件だったら，その危機の大きさに比例して，イングランドの威信にとってフランスの軍事的侵略はそれほど必要とされない．そして明らかに，もしスペイン大使館がロンドンの暴徒によって攻撃されたら，最も誇り高きスペインの愛国主義者でなくても，やはり国の名誉のためにただちにイングランドを軍事進攻する必要を感じることだろう．

ときとして小国（セルビア，ベルギー，ボーア共和国などのような）は大国に対抗することがあるが，多くの場合その小国の背後には，別の大国の後ろ盾や，あるいは大国を打ち破るに値するほどの隠された資源があることがわかるだろう．敗北の可能性があると感じながら戦争を行う国などないのだ――これこそまさに威信を守るということなのだが――．そして戦いの日々の中，人は彼らが名誉と思い込んできたものを守るために，本当の死と直面することになるのだ．

つまり威信とは，戦闘に関する名声ということになる．私は先にそれを戦争遂行能力への名声といったが，その説明では不十分であった．「戦争への意志」（will to war）があるに違いないのだ．潜在的に，アメリカという国は世界でもっとも戦争遂行能力を持ってきた．しかし1915年の大統領の宣言の中で，彼らは他の国々からさげすみをうけながら戦うのは，彼らの誇りが許さないといった．アメリカはドイツからの脅威をに接する心配はなかったし，接する可能性もなかった．もし同盟に加わったとしたら，勝利する側に確実につくことができた．したがって，アメリカの威信は勝利する側に加わることを求めたのだ．個人に目を向ければ，みな戦争で戦うのは誇りが許さないと感じているかもしれない．自分より劣っていると思う相手からの侮辱に応戦するのは誇りが許さないと感じているかもしれない．しかし国家というものはそのようなことは意に介さないのだ．

4

話をまとめよう．

国家が名誉を語るとき，それは威信を意味する言葉となる．そして国家の威信とは，戦争への意思に関する名声のことなのだ．つまるところ，国家の名誉とは，軍事力を行使するものとしての名声を守るために，軍事力を行使する意思の有無によって図られることになる．テーブルホッケーの試合が政治家たちの目には最も重要であると仮定して，そして無邪気な不作法ものが，どうしてヨーロッパ人にはテーブルホッケーがそんなに重要なのかと尋ねたとする．答えはこうだろう．国はテーブルホッケーの技術によってのみ，テーブルホッケーの技術に長けた国としての名声を保つことができるのだ．そしてこの答えはその不作法ものをさらに楽しませることになるのだ．

5章　国家の誇り（National Pride）

1

ここで，さらに辛抱できなくなった長老政治家を改めて登場させよう．

彼はこのように言う．

私は君の議論をすぐあとから追ってきた．私が理解した通りであれば，国家がその名誉について語るとき，それは威信と同じ程度の意味だといった．そして国家が威信について語るとき，それは交戦することへの名声と同じ程度の意味だといった．それゆえ，その交戦の結果が，国家にとって納得のゆく終わり方でない限りは（これは確固たる軍国主義者の物言いだが），名誉と威信という言葉は国家間で使われるとき，幻想のようなありもしないものになってしまう．しかし，たとえ戦争が受け入れられたとして，国の名誉を守り，国の威信を主張することにおいてのみ戦争は報いられるという仮説以外に，それは何か価値があるものなのだろうか．むしろほとんどの戦争の原因は，物理的なものにあるのではないだろうか．戦争の目的は経済的利益にあるのだ．領地の獲得と防衛，関税障壁の撤廃，商業圏の譲歩，港と水路の解放などだ．では君は，精神的原因が何も価値がないということを証明したことで，いかにして戦争を廃止しようというのかね．

確かに経済的な進展は戦争の１つの動機である．しかし最後通牒と戦闘の間には大きな相違がある．戦争にはまぎれもなく，その開始を宣言する政治家の心の中では，経済的な部分に原因があるといえるだろう．しかし戦争を戦うのは政治家たちではなく，一般の人々なのだ．一般の人々を（少しの間マルにとどまり『女王陛下に神のご加護を』を歌ってから）戦場へと駆り立てるには，感情的な高揚が必要なのだ．確かに100万枚の硬貨がマルにばらまかれたというニュースは，間違いなく人々を感情的に高揚させ，ヨーク侯爵の記念柱を下り，戦場へと駆り立てることだろう．しかし戦争の経済的な動機はもっと複雑なのだ．一般的な男が最後通牒の原因について十分に理解し，深く考えたならば，彼は完全に１つの確信を得ることだろう．政治家たちや産業資本家のトップなど，あるいは軍部のトップなどがいかに大きな儲けをえたとしても，彼自身はそこから１ペニーさえ得られるわけではない．彼らは週に５ポンドの収入があり，仮に無事に戦争から返ってこられたとしても（まずそこが疑わしいが），そして彼の職場が彼の復員を待っていたとしても（そんなことはありえないだろうが），そしてたとえ100万平方マイルの領土と20の油田が帝国にもたらされたとしても，戦争が終わったときには，やはり彼はやはり週に５ポンドしか得られず，さらには２倍の税金を納めることになるのだ．

いや，戦争とはたしかに経済的な理由で開戦が宣言されるのかもしれないが，感情を理由に集まった志願兵によって戦われているのだ．どれほど声高に，鉄鉱山が長老政治家に呼びかけたとしても，その声は王や国の声を通して若者に届くのだ．そしてどんなに皮肉屋な政治家でも，その若き義勇兵に，王と国は投資家用の世界の一角を守るために君の命が必要なのだ，などとは言えないのだ．

しかし戦争とはまったく経済的な原因だけで開始されるものなのだろうか．政治家でさえ感傷的な衝動の支配下にあるのではないだろうか．もし政治家の戦争の動機が純粋に経済的なものであるならば，普通は最後通牒を出す前に，賃借対照表を作成することを要求するはずだ．手に入る油田や金や鉄の鉱脈，そして彼を突き動かす何か輝かしいものなど，つまり利益となる面．そして戦争の期間や１日当たりのコスト，そして予想される死者の数（そして遺族への恩給に関わるコスト），株価の低下，敗北時の賠償，空爆でもたらされる被害といった，損失となる面．本来これらを考慮に入れなければならないのだ．しかし彼は賃借対照表など作りはしない．裁判で原告がその費用を取り戻したいと願うように，彼はただ賠償金で自身の出費をまかなおうとしているのだ．彼は今では，そのような莫大な規模の賠償金など支払い得ないものであることを知っている．しかしこの偉大で（と考える人もいるかもしれない）初歩的な発見がなされる前でさえ，損失面には人の命という何ものにも代えがたいものがあったのだ．経済的利益はイングランド人の死に匹敵するほどの何かをもたらすのだろうか．国民が陥る窮状についてはどうだろうか．とてもそうとは思われないのだ．戦争志向の政治家の経済学は，保育園児の経済学と同じなのだ．かわいらしい炭を取り出すために火の中に手を伸ばす赤子は，現実の認識をよく示している．

これが真実なのだ．国家は何か物質的な利益を求めて戦争を始めるのかもしれない．しかし現実には，それは「名誉」の名で宣言されるのだ．なぜなら，*「名誉」とは国家がいかなる犠牲を払ってでもその目的を完遂することを求めるからなのだ*．

2

今私が示した「名誉」とは，とうてい誇れるものではない．これはかつての決闘の際の不自然な誇りに過ぎない．決闘が行われていたころには，人は「戦わなければならなかった」ため戦った．なぜなら名誉が彼らにそれを命じたからだ．なぜなら，彼らの誇りは，戦わないことを許さないほどに高潔なものだったからだ．

遅かれ早かれどちらかが話題に持ち出すだろうと思われるが，この決闘との類似性ぬきに，平和主義者と軍国主義者が戦争について議論するのは不可能だろう．その類似性に従って，戦争の原因を決闘の原因になぞらえてみてもいいかもしれない．

20年前には個人的な戦争と国際的な戦争の比較がよく行われていた．たとえば平和主義者は次のように述べる．「か

つて決闘の習慣を廃止するという考えがいかにばかげたことと思われていたか．今は戦争を廃止するという考えがばかげたものと思われているようだ．しかし世界は進歩している．決闘は廃止されたのに何で戦争は廃止されないのだろうか」と．すると軍国主義者は必ずこう答える．「決闘するものを非難する大きな権力はあったが，戦争をする国家を非難することが可能なほど大きな権力など作りえないのだ．」

その頃から国際連盟の組織が考えられ，現実のものとなり，そして今は不確かにその未来を待っている．

しかしまだ議論すべきことは残っている．ただし，議論は次のようにはゆかないのだ．すなわち，国の法が決闘を廃止したように，国際法が戦争の廃止を強要できる，とは．そうではなく，議論は単純にこうなる．ある因習から逃れられたからといって，もうひとつの因習から我々が逃れなければならない理由はあるのか？

もし自分を侮辱した相手と決闘をしたら，刑務所に入れられるだろうし，相手を殺したら自分も処刑されるだろう．いくら決闘したい相手がいても，その後刑務所へ送られることが確かであれば，やり方次第では自分の命を失う可能性があるのであれば，その決闘をすることをやめるのは真実だろう．しかしより明らかな事実はこうだ．つまり，私は彼とちっとも決闘などしたくないのだ．そして私が彼と戦いたくないのはその結果が恐ろしいのではなく，彼と決闘すること自体が馬鹿らしいと感じるからなのだ．決闘の伝統は事実このようにして終わったのだ．

戦争の伝統を続ける理由は何かあるのだろうか？

ある因習から逃れられたからといって，もうひとつの因習から我々が逃れるべきではない理由はあるのだろうか？

この理由のためだ（と長老政治家は語る）．

ある考えがおのずから十分に花開くことができず，保護が必要なときにはいつも，中間期というものがあるのだ．種がまかれ，根を張るときに草に保護が必要なのと同じだ．決闘についていえば，その保護は法律によって与えられた．そしてその法の庇護のもと，個人的な戦争は間違っているという考えは育ち，現在の強さにまでなったのだ．しかし戦争については，私たちは古い問題に立ち返らなければならない．国際的な戦争が邪悪でばかげていると考える国家の心にしっかりと根が張るまで，いかなる法律で，いかなる制裁によって，我々は平和に関する考えを保護することができるのだろうか．

例を与えよう（長老政治家は続ける）．我々の多くは「チップ制度」の因習を憎んでいるが，それに対して奮闘したところで意味はないだろう．しかしチップを与えることが違法で，罰されることになったら，ひと世代かふた世代経てば，決闘が現在愚かだと思われているのと同じくらい，チップ制も愚かだと考えられるようになるだろう．そしてそれに対する法律というものも，わざわざ思い起こされることはなくなるだろう．しかし最初の法律による助けがなければ，我々に希望はないのだ．

ここで，この議論とその類似性について十分に考えてみよう．

我々はみなチップを廃止したいと考えている．確かに法律による助けがなければ，それを廃止するのは難しそうだ．もしチップを渡すことにペナルティが設けられたら，その習慣はなくなるだろうし，ほどなくしてどうしてそんな習慣が存在したのかを不思議に思いさえするだろう．そのすべては，戦争の習慣についても同じことがいえるのだ．しかしそれだけが真実だろうか．正確には「法律による助け」とは何のことなのだろうか．いかにしてその法律を機能させたらいいのだろうか．

法律は政府によって作られ，そして施行される．政府とは理論上は国家の声である．法律が「汝チップを支払うことなかれ」と告げれば，理論上は４千万のイングランド人たちは「我らはチップを払わず」と唱えることになる．いかなる人も，それを望んだときに，自分のためにそう言うことは可能なのだ．12名程度のグループであっても自分たちを反チップ同盟と称し，我らは心づけを払うことに抗すると誓いをたててもいいのだ．明らかに彼らは，それによって苦しむことにはなるだろう．彼らは物乞いの手が伸びてくる場所においては，要注意人物とされることだろう．しかしその同盟が12名ではなく，1200万のメンバーを有したとしたら，もはや彼らは要注意人物ではないし，それによって苦しめられることもないのだ．

しかし不運なことには，いかにみんなが同じ考えを持っていたとしても，1200万という人数を１つの部屋に集め，ひとつのことに同意を得るのは不可能なのだ．もし仮に成人したイングランド人がアルバートホールに一堂に会し，チップ制に対する投票が行われ，（おそらくは）満場一致で決まれば，イングランドにおけるチップ制は法律による支援なしに廃止されるのである．しかしそれは不可能なので，その満場一致の会議を引き受け，そして宣言する役割を法律が担うのだ．大義に対する法律のサポートは，その大義を破ったものに刑罰をくだすのではなくむしろ，その大義が存在することを国内に向けて公表することでもあるのだ．（決闘であれチップ制であれ）その大義が進展しないのは，その公的な発表がなされないためなのだ．そのため個々人はその仲間たちの援助に確証が持てないのだ．

今日では，ヨーロッパの平和は６つの国家の手の中にあるといえる．それぞれの国は，個人によって代表されている．そしてその６名がひとつの部屋に集い，互いの言語に堪能ではないにしても，彼らが望む１つの結論にいたるこ

とは可能だろう．彼らが同意に達したと公表することに，重要な法律も，国際政府も必要ではないのだ．彼らは公的な誓約も必要としないだろう．彼らは合意に達したことについて，自分たちで理解し，自分の耳で聞くことができるのだ．もしその６名が大義を熱望していれば，その大義は勝利するのだ．

3

まとめよう．

１．戦争とは，結果に関係なく，どこかの国が目的を達成するために武力を用いる伝統である．

２．通常戦争は何かしらの目的となるものに対しておこなわれるが，その結果の利益と損失のバランスは考慮されておらず，その目標物が獲得できない可能性についても考慮されていない．

３．物質的利益を求める国々をこの向こう見ずで非経済的な行為へと駆り立てる動機は，「名誉」「愛国心」「国家の威信を保つ必要性」などさまざまに語られるが，根本的にはかつて決闘を行ったものたちの「名誉」と同じものである．

４．ここで名誉と呼ばれているものは，思慮深さや人間性といった抑制する働きのある動機をはるかにオーバーしている．

５．完全に「因習的」であるならば，戦争は放棄されうる――

（a）文明への精神的損失なしに．

（b）もしその放棄が普遍的であるなら，いかなる国家の悲嘆も不安もなく．

（c）わずか数カ国の代表によって同意されうるものであるため，困難なことはなに1つなく．

[訳注]

（１）原文では“hundred and thirty-four words”“seventeen lines”である．いずれの数字も，斜体で記された第一次大戦の概要を描いた箇所の単語数と行数を示している．なお，本稿では，邦訳の文字数，行数を記載している．

（２）ミルンは本書の中でしばしば，自身の論に異議を唱える架空の人物を登場させる．そしてその反論への反論という形で論を展開する．

（３）William Shakespeare *Henry IV* からの引用．

（４）William Wordsworth “Say, What Is Honour?—’Tis the Finest Sense of Justice”からの引用．

（５）Richard Lovelace “To Lucasta, Going to the Wars”からの引用．

（６）Alfred Tennyson “Oenone”からの引用．ただし「知恵」（wisdom）を「名誉」（honour）と「意図的に間違えて」いる．

（７）ここでは，意味がよく似た３つの単語について考察が行われている．本稿ではそれらを区別するために，“honour”を「名誉」，“prestige”を「威信」，“reputation”を「名声」と訳す．

引用文献一覧

Milne, A. A. *It’s Too Late Now: The Autography of a writer*. London: Methuen, 1939.

-----. *Peace with Honour*. London: Methuen, 1934.

-----. “War with Honour”. Macmillan, 1940.

Wullschläger, Jackie. Inventing Wonderland. Methuen, 1995.

高山宏.「クリティックなんて『プー』！――A．A．ミルン文学の『プー』ラドックス」『ユリイカ』36.1（2004）：61-71.

林田敏子.『戦う女，戦えない女――第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』人文書院，2013.

吉村圭.「A．A．ミルン『アルマゲドン』」『鹿児島女子短期大学紀要』51（2016）：97-101.

-----.「A．A．ミルン『名誉ある戦争』」『鹿児島女子短期大学紀要』54（2018）：139-151.

-----.「第一次大戦のカリカチュアとしての『アルマゲドン』：A．A．ミルンが描いた大戦前夜」『比較文化研究』114（2014）：281-294.

（2018年12月11日　受理）